苗立枯病の種類と診断ポイント

病原菌	診断のポイント
ピシウム菌	地際部の褐変がやや淡く、また水浸状に腐敗し、急にしおれて枯死する。また、坪枯れ症状を呈し、地際部にカビがみられないのが特徴である。
フザリウム菌	１か所に発生すると次第に拡大し、ついに枯死して穴になる。地際部に白いカビがみられ、床土の断面をみると、籾を中心に白色から淡褐色のカビが蔓延している。
リゾクトニア菌	被害は移植前に急に発生し、箱のほぼ中央部にしおれて黄化した苗がみられる。かき分けてみると、下葉や葉鞘が灰緑色になり、いわゆる葉腐れ症状となる。この部分に菌糸がくもの巣状になり、やがて白から淡褐色の菌核を生ずる。
トリコデルマ菌	苗の被害はフザリウム菌の場合と似ているが、葉がより黄化する点が異なる。出芽時にはリゾープス菌のように床土の表面に白いカビがみられ、出芽前に立枯れ出芽不良になる。緑化期以降になると、地表面籾の周りの白いカビは青緑色に変わるので他の菌と区別できる。
リゾープス菌	出芽時に箱全体が白カビで厚くおおわれ、やがて胞子ができると灰白色になる。被害のひどいときには、出芽前立枯れ、出芽不良になる。出芽しても苗の生育は悪く、黄緑色になり、根は短く、根数もかなり少なく、その先端が異常にふくらむこともある。
ごま葉枯病菌	まず鞘葉、つづいて子葉鞘、さらに第１本葉の葉鞘が褐変し、草丈は低く、出すくみとなり奇形となる。子葉や本葉では黒褐色短稈状の斑点を生じ、この部分がねじれたり、曲がったりする。
白絹病菌	地際部の葉鞘、籾根の回りに絹糸状の菌糸が蔓延し､やがて白色から栗色の丸い菌核をつくる。リゾクトニア菌のような葉腐れ症を示さず､下葉は黄化して、菌に侵された部分は淡褐色になる。
もみ枯細菌病菌（苗腐敗症）	出芽後まもなく、苗が細く湾曲して褐変枯死するが、特に腐敗がひどい。腐敗枯死しない苗は、葉鞘が褐変し、次に出る新葉は白色から淡褐色になり、この新葉を引っ張るとたやすく抜け、その基部に褐色帯がみられる。このような苗は腐敗苗を中心に坪枯れを呈する。
苗立枯細菌病菌	発病初期のり病苗は、第２、第３葉葉身の基部が黄白色となり、やがて水不足のように萎凋し、苗全体が赤褐色の針状となって枯死する。 もみ枯細菌病と異なり、新葉は抜けにくい。
褐条病菌	葉鞘や葉身に褐色の条斑が現れるのが特徴である。まず鞘葉に暗緑色水浸状の病斑が現れ、次第に第１～第２葉の葉鞘から葉身へと進展し枯死するが、第４葉期以降の感染は条斑のみ形成し、枯死しない。